

—特別寄稿—

滋賀医科大学看護学科20周年記念に寄せて

竹尾 恵子
佐久大学学長

滋賀医大から電話があつて、看護学科設立 20 周年になるので特別寄稿を！と依頼され、思わず、「ああ、あれからそんなに日時が経ったのか！」としばし感慨に耽ってしまいました。さて、当時を思い出せるかしら？ 考えてみれば大分昔の事、滋賀医大を去ってからも、今までいくつかの大学で看護教育に携わってきて、その時々には様々なことがあり、果たして滋賀医大の頃の事を定かに思い出せるか、少々不安です。

しかし、滋賀医大は私が初めて関東以外で生活したところで、そうした意味では大変印象深いところ、時期でもあります。

私が東大医学部保健学科の看護教育から外へ出ようと思ったきっかけは、先輩の故見藤隆子先生が東大を退官され、私がお後もそこで、看護教育を続けていける状況になかったからなのです。そうした私の状態を察知して、いくつかの大学から招請をいただきましたが、滋賀医大については、東大事務局におられた S 氏が、当時、滋賀医大の事務局長に転出されていて、新たにそこで看護学科を立ち上げるにあたって、わたくしにお声をかけてくださったと記憶しています。「場所は滋賀県の津市」といわれても、東京近辺しか知らない私は、かなり尻込みしていました。そこで、東大の衛生学教室でご指導いただいた恩師に相談したところ、「津市はいいところだよ！京都に近いし、行くなると津市がいいよ！」と進めて頂いたのです。

そんなわけで、滋賀県津市の滋賀医大で仕事をすることになりました。宿舎は大学構内といってもよいところにあり、5 階の眺めの良い部屋でした。朝晩5 階までの登り降りは少々息切れしましたが、当時は若かったせいか、さほど苦もならず、はるかに琵琶湖や比叡山を望む景観を楽しませていただきました。

自分の履歴書を見ると、私が着任したのは、看護学科開設の 1 年ほど前、1993 年(平成 5 年)7 月でした。

また看護学科のための校舎もなく、事務棟の 2 階に仮住まいでした。そのころ、いろいろと助けてくださった筒井裕子氏は、当時、附属病院の看護部長をされており、その後、看護学科成人看護学講座の教授として着任されました。土地の風習や文化に慣れないわたくしに何かと助言をくださって、助けられたことを、今も感謝しています。

看護学科設置に当たっては、看護学を基盤にした学科編成を作り、新しいカリキュラムを実施していこうと思っていました。当時、既に看護学は医学から独立して、いわゆる「看護の科学」としての構造を立ち上げていた時期にありました。その頃、大いに議論されていた「看護理論」もいわばこうした「看護学としての構造」を作り上げようとする、看護教育に携わる者たちの考えを反映したものと思います。大学で教育する看護学は、医学の下に看護をくっつけたような形の教育ではなく、基礎看護学に始まって、成人看護学、老年看護学、母性看護学、小児看護学、地域看護学といったような区分のもと、それぞれの領域の看護学を修めた教官が教授としてこれを統括し、教えるべきであるという考えが定着してきていました。

いわゆる内科学のもとに内科看護を教えるといった教育とは決別するということです。文科省もこうした考えのもと、各大学に看護学独自の教育の在り方を推奨し、支援してくれていました。看護学の教官としては、「看護学を修めたもの」というところが重要です。しかし、実際にはなかなかこれを実現することが難しく、教授全員を看護職で満たすことは、当時、滋賀医大でも困難でした。いま現在、看護系大学は 200 校を超していますが、教員の構成を見ると、その大学の看護教育に対する位置づけ、在り様が、なんとなく類推できる気がいたします。看護学部として独立して教育に当たっているところは、教員構成もかなりしっか

りしているように思えます。

私は、平成10年1月まで、滋賀医大に在籍させていただきました。5年に満たない期間でした。最後の年には大学院修士課程を立ち上げるべく準備を整え、ほぼ文科省からの承認も得られていましたので、できれば大学院看護学専攻の完成年度を見届けたかったのですが、私の家庭の事情で急遽、筑波大学大学院のポストに異動したのです。夫に重大な病気があることが判明し、筑波大学付属病院で手術を受け、療養をさせていただきます。そのような事情で、当時、学長をされていた小澤和恵先生には、いろいろとご支援いただきましたが、その夫も9年前に旅立っていきました。今になって振り返ると、私にとって、この時期はいろいろの気がかりが重なり、疾風怒濤の時代だったように思われます。

滋賀医大で教育に当たった期間はわずかでしたが、幸い看護学科の卒業生が、3人ほど、今も私の近くで仕事をしてくれています。名前を挙げさせていただくと一期生の小山智史君、彼は今、私のいる大学で講師として看護教育に力を発揮してくれています。成人看護学のベテランとなっていますが、同時に「人体の構造と機能」も教えてくれています。「看護学を修めたものが、看護学生に必要な人体の構造と機能を教えるようになってほしい」ということが私の願いでもあり、これを実現してくれているのです。学生の評価も高く、彼のこれからの成長を期待しているところです。他の大学のモデルになれるようにと願っています。

高山充君は4期生です。彼は今、東京の看護系大学で助教をしています。私の監修した「看護技術プラクティス第3版」の分担執筆をしてくれました。

残る一人、金子節志君は2期生で、つくばでの臨床経験をもとに、国立国際医療センターを経て、ナショナルセンターの一つ、成育医療研究センターで、現在、看護師をしています。臨床で指導者になってくれる日を楽しみにしているところです。

なぜか男子ばかりが関東に来ていて、私の周囲にいてくれるようです。当時、看護学科には男子学生が少なく「おとこ組」なるものを作っていたようなので、その結束が今に繋がっているのかもしれませんが。

私が滋賀医大に着任して、そのあと間もなく滋賀医大に着任してくれた東大の教え子が3人ほどいました。

そのうちの2人、小澤三枝子さん、水野正之君は、現在、国立看護大学校で、それぞれ教授、准教授として活躍してくれています。浅野美礼君は筑波大学で看護教育に携わっているはずですが、彼らもまた、滋賀医科大学看護学科創設時に看護教育に力を注いでくれた貴重な、ありがたい逸材たちです。

私が滋賀医大に着任した当時は、看護系大学は日本に十数校しかなかったのですが、あれから20年余を経て、先にも触れましたが、2014年現在220校に近い看護系大学が看護学教育を行っているのではないかと思います。大学院についてみると、2013年時点で看護系修士課程が約140校、博士課程が67課程（医学書院SP課 看護学校便覧2013）あります。

しかし、当時の私は、ここまで看護教育機関が増えるとは想像していませんでした。様々な社会の変化、時代の要請があつて、このような経過が見られたものと思います。

これからの看護職者は看護学の教官だけでなく、臨床においてもリーダーとして活躍するに当たって、修士の学位くらいは必要となってくるでしょう。そうした将来展望を考えると、滋賀医大でも修士の学位を持つ看護職をこれから大いに輩出し、臨床に送り出していきたいと思います。

滋賀医科大学看護学科は国立医科大学の中では最初に看護学科を立ち上げた大学だと思います。そう思うと、医科大学の中の看護学科として、他のモデルとなるような看護教育体制を作り上げてほしいと願うところです。また、卒業生にあつても、どうか多くの看護分野でリーダーとなっていてほしいと願っています。いずれ、母校の看護教育に貢献できるような人材が育ってくれることでしょう。

先日、滋賀医大当時の写真はないかと探しておりましたら、当時、附属病院の看護副部長をされており、後に看護部長になられた井下照代氏の写真が出てきて、懐かしく、大変お世話になりました。ネットで調べてみましたら、現在は聖泉大学看護学部の教授として看護教育に当たっておられる様子、うれしい限りです。また、滋賀医科大学付属病院の現看護部長さんは、副院長としての役割も取られておられる様子、病院管理の分野でも、看護部がしっかり位置づけられていて、

看護部の成長を感じさせていただきました。

滋賀医科大学看護学科設立20年ということは、最初の卒業生たちが仕事を続けていれば、15・16年ほどのキャリアを持つようになっていることでしょうか。今や、いずれの分野においても中堅として力を発揮してくれている筈です。どうか滋賀医大看護学科の卒業生として、看護界でこの人ありという存在に成長していただきたく願って、この稿を終えさせていただきます。